

2023 年第 1 四半期にはウクライナ戦争に関連する書き込みをかなり多数フェイスブックに投稿した。その多くは活字で公刊したり、私のホームページにアップロードして公開したので、この欄にはそれらは収録しないことにする。

20230130

先週末の 28 日、多言語社会研究会の例会にオンラインで参加した。2 つの報告が行なわれたが、そのうちの、山口博史・神原ゆう子「民族混住地域における言語選好：スロヴァキア南部の地方都市を事例として」の報告および討論を聞いた。スロヴァキア南部はハンガリー語が優勢な地域だが、歴史的に国境が変動してきたことから「境界変動地域」という概念を設定し、住民の言語選好の実情とその規定要因に関する量的調査の結果をもとにした報告。

移民の言語使用に関する研究は数多いが、「境界変動地域」においては、人間が動くのではなく境界線が動くという点に独自性がある。調査地点のコマルノ市は民族混住地域であり（自己申告でハンガリー系 54%、スロヴァキア系 34%）、バイリンガリズムが普及しているが、バイリンガル家族における子世代の選好言語を被説明関数とした要因分析を行なうと、子は母の影響を強く受けるという定説と違って、父の言語選好の方が影響が大きいという意外な結果が示された（もっとも、これは「選好言語」という質問の立て方に左右される面もあるかもしれない）。

2 人の報告者のうち神原は地域研究をメインとする人類学者（スロヴァキアが主たるフィールドだが、ハンガリー語も習得して、ハンガリーでもある程度調査を行なってきたらしい）であるのに対し、山口は定量的手法を得意とする社会学者で、これまでベルギーや日本などを対象として研究してきた（その他、ドイツ、サハリン、朝鮮半島などを対象とする研究者たちともチームを組んで、比較に取り組んでいるとのこと）。このように、異なる手法の研究者たちの組み合わせによる共同作業だという点が興味深かった。山口によれば、量的研究は質的研究の補完物（質的研究で発見された相関関係をより精緻に裏付ける）と見なされがちだが、場合によっては部分的ブレークスルーをもたらすという。それというのも、当事者も調査者も自覚していないような事柄は質的調査にそもそも浮上しないが、そうした事柄が量的研究で見つかることがあるということらしい。今回の研究の場合、ジェンダーの影響がそれに当たるようだったが、今後に残された課題も多いということで、一種の中間報告なのかもしれない。ベルギー、ドイツ、サハリン、朝鮮半島などを含めた比較研究についても、まだ明確な結論が出る段階ではないようだが、とにかく野心的な企図だと感じた。

私自身の研究とは大分縁遠い領域の話であり、十分理解できないところもあったが、新しい傾向の研究に接して、頭のリフレッシュをすることができた。

20230203

うる覚えの話。

いつ、どういう形で読んだのか記憶が定かでないが、吉田秀和がどこかで次のようなことを書いていたのを読んだ覚えがある。曰く、人間誰しも、後になって「なんと恥ずかしい愚かなことをしてしまったのだろう」と思うような経験があるもので、自分もそういう経

験を思い出すと、長い時間が経った後でも、思わず恥ずかしさに身を縮めたくなることがある。とはいえ、そういうことを言っているだけでは仕方ないので、自分はそういう愚かなことをしてかす人間だということを実感しながら、なるべくそれを繰り返さないよう心がけるほかない、云々。出典がはっきりせず、再確認もできないので、ここでの要約がどのくらい正確かも保証の限りでないが、とにかくこういう文章を読んだという記憶は私の心に焼き付いた。そして、吉田秀和のような人でさえそうなのだとすることは、何となく私を慰めてくれるような気がした。彼でさえそうなのだとしたら、自分のような凡人が恥ずべき愚行をしても大騒ぎするほどのことではないという気がして、自分の愚行を意識するたびにこの文章を思い出すようになった。

この文章の出典をご存知の方がいたら、御教示ください。

20230216

ここ半年ほどの間、各種の日本共産党論が提起されて、活発な議論の対象となっている（創立 100 周年ということが一つのきっかけ）。それらのうちでは、（重要な例外である中北浩爾著を除き）共産党の内部からの問題提起およびそれへの反響がわりと大きな位置を占めているようだ。更に、今年に入って急速にクローズアップされたのは、松竹伸幸という人（少し前まで私も名前を知らなかったが、今や「時の人」だ）が党首公選論を説く本を出版したこと、そしてその彼が党から除名されたという事件である。これ自体は「コップの中の嵐」と言うこともできるが、それだけにはとどまらない意味もなくはない。今の日本で野党的な諸勢力の結集あるいは共同行動がどの程度成り立つかという問題にとって、共産党が他の組織や個人からどの程度安心できるパートナーと見なされるかという問題も大きな位置を占めているからである。実際、この件をめぐる、党内だけでなく党外の様々な人たちからも種々の論評があらわれ、活発な論争が進行している。私の見聞の範囲でいうと、現役の共産党員たちは「松竹氏は規約に違反したのだから、処分は当然だ」と主張することが多いのに対し、共産党シンパの間では「これを契機に党が自己変革するのではないかと期待していたのに、そうならなくて残念だ」という声が多く見られる。そして、党員でもシンパでもないが一定の関心を寄せてきた人たちは、もともと共産党にはあまり期待していなかったけれども、ますます愛想が尽きたという意見が目立つ。だとすると、これを契機に党内と党外の溝がますます広がり、共産党の孤立が一層進むということになるのではないか。それ自体はコップの内部事情だが、コップの外の広い政治状況にとってもまんざら無縁でないことのように思える。

（付記）。詳しくは知らないが、小池晃書記局長は少し前にパワハラで自己批判したようだ。そして今回は、除名に関する異議申し立て手続きは党規約にはないと述べた直後に、その間違いを指摘されて発言を訂正した。短期間に 2 度も公けの場で失点を重ねると、さすがに責任問題が起きて不思議はないが、そうなるのかどうか。書記局長という要職者の失点は更なる波及効果を引き起こしてもおかしくないが、そうなるのかどうか。これもコップの中の問題だが、コップの外にも何らかの形で関係するかもしれない。

20230228

山崎ハコという、一部に熱狂的なファンのいる個性派の歌手だが、彼女の「暗さ」とか

「人間嫌い」といったイメージは所属事務所によって作りあげられた虚像だったという内輪話に接した。これがどこまで事実在即しているのかは分からないが、一般論として、そういうことは案外あるのだろうなという気がした。そういえば、森田童子の場合も、叔父であるなかにし礼の「アングラ的なスタイルで売り出したい」という思惑によってイメージづくりをされたようだ。

山崎ハコにせよ森田童子にせよ、マネージャーやプロデューサーの思惑によって虚像をつくられながら、その虚像をあえて引き受けて、それを生き切ることで独自の世界を創造したということかもしれない。私は今から半世紀ほど前に、大学院で修士論文を書いている最中にたまたまラジオから流れてきた彼女の歌を聴いて、棍棒で頭をぶん殴られたような衝撃を受けた覚えがある。それ以来数年間、彼女の歌の独自の雰囲気浸っていた。時間が経つに徐々にその感覚は薄れたが、そのときの記憶は、遅ればせの青春時代の感覚とつながって長く残った。今度読んだ文章によれば、山崎ハコはすべてを託していた事務所の社長に裏切られ、一文無しになったばかりか、歌を売り込む術もなくなって、ほとんどホームレスのような状況に陥ったことがあるとのこと。それでも、自分には歌しかないと考えて、それまで経験したことのないマネージャーやプロデューサーのような仕事も自分でやるようになって、再起への道を探ったという。十代で鮮烈なデビューをかざった彼女は、還暦過ぎてどういう歌をうたっているのだろうか。

20230309

一昨日、武藤祥・山崎望両氏を共同代表とする「自由民主主義の裏面史」研究会のオンライン会合に出席した。「裏面史」という言葉で何を意味するのかという大問題はさておき、当日は性格を異にする二つの報告があり、どちらも私自身の専門とは遠いながらも学ぶところの多い刺激的な報告だった。

第1報告は、吉田徹「国民戦線（FN）の知的源流について」。

フランスの国民戦線（FN）が党首交代を一つの契機として、それまでの「極右」イメージを薄め、いわば「脱悪魔化」して、選挙における得票率を伸ばし、いまや最大野党の座を占めるに至っているという程度報道され、一応知られているが、それ以上立ち入ったイメージはよくつかめないままだった。本報告は「知的源流」ということで、1960年代以降のフランス保守思想の流れを解説し、中でもブノワという人物の言動を丁寧に追っていた。1960年代末といえ、68年5月に象徴される青年の左翼運動の高揚がすぐ思い浮かべられるが、同時代の若者の間には、これと対抗して文化的ヘゲモニーを右派の側に奪い返そうという動きもあった（そういえば、日本でもアンチ全共闘の右派学生運動が同時代にあり、それが後の日本会議につながったようだ）。ブノワの思想はかなり入り組んでおり、単純な「右翼」「保守」といったレッテルで裁断されるようなものではないようだ。また、FNへのブノワの影響も単線的ではなく、思想／イデオロギーと政治的実践／政治家の関係性を見定めるのも困難だが、とにかく「アイデンティティー右派」の思想が拡散し、定着したのは確かだという。「極右」の中にも多様性があり、むしろそうした多様性こそがFNの復元力・持続力につながっているということが最後に指摘された。報告後の討論では多くの興味深い質問やコメントが出されたが、中でも、FNが議会内に位置を占める上で暴力分子をどうハンドリングしているのかという問いに対して、FN系

の集会に暴力分子がやってくることに指導部は苦慮しているが、とにかくネオナチ的言動をとる人を排除していると答えたのが印象的だった（これは後述の個人的感想と関係している）。

第2報告は、中西嘉宏「「悪」の万能さ：ミャンマー国軍の脅威認識について」。

報告は冒頭と末尾で広い文脈での理論的問題提起を行ない、中間部ではミャンマーの具体的状況に密着した丁寧な解説を行なうという構成で、地域研究の成果を当該地域になじみの薄い人に説明する上で適切な考慮の払われたものだった。まず、広い研究状況の総括として、1980年代には政治文化論の隆盛（ギアツ、アンダーソン、スコットなど）が見られたが、今や政治文化論は流行らなくなっていることが指摘され、その要因として冷戦終焉、グローバリズム、社会科学の科学化（人文学の後退）、本質主義批判、文化論の保守性などが挙げられた。その上で、この共同研究全体のテーマである「裏面史」ということについては、いくつかの類型（脱定着、強権化、疑似民主主義化、移行の失敗）があるのではないかという問題提起がなされ、ミャンマーは移行の失敗から統治の脆弱化へという流れがあったと述べられた（他の東南アジア諸国では、さまざまな問題はありつつもとにかく統治能力は向上しているがミャンマーはそうではないという）。このように議論の枠を設定した上で、2017年ロヒンギャ危機と2021年ミャンマー危機を焦点としつつ、歴史的・社会的背景が詳しく解説された。たくさんの論点が提示されたが、個人的には、民族的差異はそれ自体では紛争にならないという指摘、また1988年までは社会主義イデオロギーを持つ軍事政権だったが、その後はイデオロギーがなくなったという指摘が興味深かった。報告の末尾では、民主化の基礎である政治共同体が不安定な国にとって「裏面」とは何か、また理想ないし先進的な民主主義国との「距離」で測ることへの違和感が述べられ、民主主義／民主化という言葉の難しさが改めて確認された。

この報告をめぐるでも、多数の興味深い質問やコメントが出されたが、その中で三牧聖子氏が現在のウクライナ戦争に言及したのに触発されて、私も横合いから口を挟み、独立後のウクライナ政治の軌跡を追うという観点にとって本日の議論がどういう含意をもつかについていくつかの思いつきを述べさせてもらった（以下、当日は話さなかったことの補足を含む）。まず、「政治的共同体の不安定性」という中西氏の問題提起は重要な意味を持つが、それをどのように具体化するかが問題となる。研究会ではアフリカの例が言及されたが、ウクライナに限らず旧ソ連諸国はソ連時代に名目的な「主権国家」とされていた体裁を裏付けるため、かなりの程度国家制度が整備されていた背景があり、それが独立後に引き継がれたので、アフリカとは大分状況が異なる。そのため、大半の旧ソ連諸国は、タジキスタンを例外として、内戦に引き裂かれることなく国家を維持することができていた（ウクライナでそれが突然崩れたのは2014年のこと）。民族間紛争が武力紛争になった例もいくつかあるが、その多くは、数年のうちに停戦に漕ぎ着けた。その意味で、「民族的差異はそれ自体では紛争にならない」という指摘は重要な意味を持つ。一般論としていえば、民族問題が政治化して、遂には国家性を揺るがすという可能性もあるが、チェコとスロヴァキアの「ビロードの分離」の例を想起するなら、分離が必ず非平和的な形をとると決まっているわけではない。政治共同体の不安定性と関係して、「無秩序よりは統治の維持あるいは再建が優先する」という議論も重要な点に触れているが、旧ソ連諸国の例に即して考えるなら、こういう論理が比較的有効になりやすいのはカザフスタンであって、

ウクライナにはあまり当てはまらない。こういうことを考えていくと、ある時期まで社会的分岐およびそれに基づく政治対抗が比較的平和的な形をとっていたウクライナで急激に暴力的対決が生じたのはどのようにしてかという問題が浮上する。ここで吉田徹氏による第1報告に戻って、「極右」「脱悪魔化」「暴力分子」といった論点との関わりが気になってくる。フランスとウクライナでは、これらの論点が一定の重要性を持つという限りでは共通しているとはいえ、より具体的には違いも大きい。この差異をどのように掘り下げていくかが大きな問題ではないかと思われた。

個別報告の内容から離れて、勝手な思いつきを述べたが、一昨日の研究会はフランスとミャンマーという大きく隔たった事例を取り上げながら、「自由民主主義の裏面史」を考えるという野心的な試みだったので、そこにウクライナその他の事例をつけて加えてみることも——下手をすると、混乱を増幅するだけになりそうでもあるが——それなりの意味があるのではないか。なお、この共同研究は、新年度から5カ年の計画で科研費（基盤A）を交付されることになった。若手・中堅たちの間に年寄りが紛れ込んだような形になり、足を引っ張ることにならないか懸念も覚える。研究会に高齢者が参加する際の通弊として、若手の斬新な発想を理解することなく、勝手な持論を延々と披瀝するということがあるが、私もその悪癖と無縁ではない。そのことを自戒しつつ、多少なりとも貢献できるよう微力を尽くさなくてはならない。